

学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と 次年度への方策	総合評価
	教務課	【①教科指導と生徒指導の一体化】 ○観点別評価の評価方法や運用の研究 (具体的方策) ・教科に観点別評価の評価方法や評価材料等を調査(教科主任に依頼)する。また、他校での情報を集約したものを校内で共有することで、次年度に向けより効果的で適正な運用を研究する。	A:観点別評価について現状の評価方法や評価材料等を調査(教科主任に依頼)し、その結果を集約し全体で共有した。また、他校の情報を収集したものを共有することでより効果的な観点別評価の運用につなげることができた。 B:観点別評価について現状の評価方法や評価材料等を調査(教科主任に依頼)し、その結果を集約し全体で共有することができた。 C:観点別評価について現状の評価方法や評価材料等を調査(教科主任に依頼)し、その結果を集約した。	・観点別評価について、各教科に現状の評価方法や評価材料等を調査し、2学期中に結果を集約をして共有する。また、他校での情報を可能な範囲で収集し、今年度中に共有する。	B	【達成状況】 ・観点別評価について、現状の評価方法や評価材料等の調査のフォームを作成し、教科主任に回答の依頼をした。結果を集約し、全体に共有した。また、他校での評価方法について、教務課内で共有した。	B	主体的に学習に向かう態度の観点については、他校での参考となる事例を集めることができなかった。次年度は対象校の範囲を広げて収集していきたい。	
	進路課	【②進路実現につながるキャリア教育プログラム】 高い志をもつ自律した学習者の育成のため、3年間を見通した進路指導計画や進路指導プログラムの検証・改善を進め全ての教員が自信を持って生徒の進路実現に向けた指導ができる体制を構築する。 <具体的方策> ・進路LHRや進路探究の時間の見直しを行い、全ての教員が高い水準で指導ができる体制を整える。 ・面談シラバスに基づいたHR担任、教科担任などの教員による生徒面談を行い、高い志を持った自律した学習者を育成する。 ・実力検査や校外模試などの学力分析を綿密に行い、入試問題研究と合わせて、生徒個々の学習進捗や志望に応じた多様な学習指導のあり方の研究を進め、個別最適化された教科指導を実施していく。	【学校自己評価アンケート<生徒>】 ・進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。(R6 全体 83.4%) ・自律的に家庭学習に取り組んでいる。(R6 全体 74.8%) A:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を上回り、具体的方策も十分に行うことができた。 B:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度程度であり、具体的方策も行うことができた。 C:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を下回り、具体的方策も十分に行うことができなかった。 【各年次における学力分析会の実施回数】 A: 8回以上 B: 6回以上 C: 6回未満	・進路指導プログラムに基づいた計画的な進路指導を実践している。進路LHRは各年次で2回程度行い、外部講師による進路講演会も開催している。また、進路だよりを計画的に発行(1年次6回、2年次8回、3年次4回)し、タイムリーな情報発信と啓発活動を継続している。 ・年度当初に面談シラバスを提示。面談の目的や内容が明確化されたことで、生徒が自身の学習状況や進路希望を振り返る機会を確保できている。また、面談を通じて学習意欲の向上や将来への展望を語る生徒も増え、一定の成果が見られる。 ・昨年度に引き続き、教科内で入試問題研究を進めている。また、実力検査や模試の結果について学力分析を実施している(1年次2回 2年次1回 3年次5回)。	B	【達成状況】 ・「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。」 肯定的評価割合 生徒85.7% 達成基準B ・「自律的に家庭学習に取り組んでいる」 肯定的評価割合 生徒71.5% 達成基準B ・「学力分析会の実施回数」(1月現在) 1年次:4回 2年次:4回 3年次:9回 1・2年次については1月実力検査・模試後に実施予定 ・達成状況は全体としては昨年並みであった。進路指導プログラムに基づいて3年間を見通した進路指導を行い、生徒へ必要な情報を提供することができている。 ・自律的に家庭学習に取り組んでいる生徒の割合は昨年度と同様の数値であったが、同様の項目の教員回答結果との差が小さくなっており、学校全体で「自律した学習者の育成」に取り組んでいると考える。 ・実力検査や模試の結果について各年次で学力分析を計画的に行い、その分析結果を年次会議や進路検討会などで共有できている。一方で、教科間の垣根を越え、生徒の学習状況に応じて指導の重点を相互に調整するまでには至らず、連携の在り方に課題が残った。	B	・進路探究の更なる充実を目指し、探究課と連携して総合的な探究の時間の授業内容の改善に取り組んでいる。 ・来年度の実施の様子を検証していく。 ・「自律した学習者の育成」に関して方針は一致してきているが、実現に向けた取組内容と生徒の学力向上の成果については慎重に評価する必要がある。その検証を進めていく。	
	探究課	【③学力のすそ野づくり<非認知能力の育成>】 ○総合的な探究の時間の充実 ○課題解決能力、プレゼン力等を育む機会の充実 ○大学や地域と連携したキャリア教育の充実 <具体的方策> ・「身につけたい力」の育成 コモンリーブリックを活用した自己評価の実施・検証 ・2年次課題研究・中間発表会の活用(振り返り活動をより充実させた探究サイクルの確立)	【学校自己評価アンケート<生徒>】 ①「総合的な探究の時間<Minamix>やLHR、講演会等を通して探究的な学びの機会が充実している」(R6 全体 83.4%) ②「総合的な探究の時間(Minamix)やLHR・講演会等により、物事を様々な角度から考えられるようになった」。(R6 全体 76.9%) R6 ①②の平均値 80.2% A:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を上回り、具体的方策も十分に行うことができた。 ※A:①と②の平均値が83%以上 B:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度程度であり具体的方策も行うことができた。 C:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を下回り、具体的方策も十分に行うことができなかった。 2. 学校外での探究的な活動への行事参加者事業数(大会等)が昨年より増加した。(R6 8人) A:10人以上 B:5人以上 C:5人未満	・「身につけたい力」の育成についてコモンリーブリックを活用したルーブリック評価を実施し(1年4/24、2年4/23、3年4/22)検証した。 ・「総合的な探究の時間」課題研究の深化をはかるため、校外での調査活動ルールを作成・共有し、3グループが校外での調査活動を行った。 ・倉敷市未来ミーティングに3年次生3名が参加した。 ・第1回ルーブリック評価にて3学年の平均レベルが「創造力(グローバルビジョン)」2.4、進取の精神(キャリア設計力)は2.5であった。 第2回評価で2項目ともに2.7以上を目指す。次回は12月に実施し検証する。	B	【達成状況】 学校自己評価アンケート<生徒> ①「総合的な探究の時間<Minamix>やLHR、講演会等を通して探究的な学びの機会が充実している」(R6 全体 83.4%) R7 83.7% ②「総合的な探究の時間(Minamix)やLHR・講演会等により、物事を様々な角度から考えられるようになった」。(R6 全体 76.9%) R7 80.1% ・R6 ①②の平均値 80.2% R7 ①②の平均値81.9%であった。②のアンケートは過年度から3.2%上昇した。 ・課題研究の内容を発表する校外での行事や大会参加者事業数(大会等)(7)及び参加者数(39名)と昨年より増加した。(R6 8人) ※は新規プレゼンテーションアワード(玉島)3チーム10人 PBLフォーラム2チーム4人 FMTークセッション1チーム2人 集まれ科学への挑戦者4チーム17人 倉敷市未来ミーティング1チーム3人 *イノベーションコンテスト1チーム2人 *日本農芸化学会中四国市民フォーラム 1チーム1人 ・コモンリーブリック(全学年)では4月から12月で「創造力(グローバルビジョン)2.4から3.1へ、進取の精神(キャリア設計力)2.5から3.3へと自己評価は上がっている。 行事の要項にその企画の意図や目的、身につける力を明記することにより、生徒、教職員ともに行事内容の取り組みを充実させることができた。	B	次年度「総合的な探究の時間」の教育課程の変更に伴い、その授業内容を体系化し、教員・生徒ともに周知する。	
	1年次	【①教科指導と生徒指導の一体化】 自律した学習者の育成に向けて、基本的な生活習慣を確立し、進路実現に必要な学習時間の確保をする。可能性を自ら開くことがないよう高い志を持たせる。 (具体的方策) ・年5回の担任面談や必要に応じた教科面談や主任面談で夢の実現に向けて自走するための学習習慣を確立する。 ・習熟度別授業の特性を生かし、レベルに合った授業を展開して、学力向上に役立て家庭学習につなげる。 ・進路指導プログラムに沿って、系統的に進路指導を行う。また、年次集会や進路LHRで「高い志」を持つような講話を行う。	【学校自己評価アンケート<生徒>】 ・「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。」(R6 1年次 83.2%) ・「自律的に家庭学習に取り組んでいる。」(R6 1年次 66.7%) A:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を上回り、具体的方策も十分に行うことができた。 B:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度程度であり、具体的方策も行うことができた。 C:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を下回り具体的方策も十分に行うことができなかった。	・担任面談[年度当初・6月・9月]と実施している。生徒の学習状況や文理選択の話を中心に意義のある面談を行えている。 ・高い志を持たせるために、「0⇒1面談」を実施した。難関大学を狙える層を中心に担任+担任以外の先生との面談を実施した。継続的に続けていきたい。 ・例年行っている「Word Cup」(英語の単語コンテスト)を、さらに拡大して夏の補習期間中に英語+国語+数学のクラス対抗の形で開催した。補習期間にもう一度実施したい。	B	【達成状況】 ・担任面談[年度当初・6月・9月・12月]と実施している。12月には担任面談以外にも駿台模試を受験した生徒の希望面談を行った。 ・学校自己評価アンケートの結果は、「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。」は86.3%(R6 1年次 83.2%) ・「自律的に家庭学習に取り組んでいる。」は66.4%(R6 1年次 66.7%)という結果になった。 ・「Word Cup」を拡大して夏の補習期間にもう一度実施したい。	B	・引き続き担任面談の強化と難関層などに対する効果的な面談を実施したい。 ・「自律的に学習に取り組んでいる」の肯定評価が低い数値であった。自分の志望に対して何をすべきなのかを面談などを通して具体的にアドバイスできるようにする。	

学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と 次年度への方策	総合評価
学力向上と進路実現	2年次	【①教科指導と生徒指導の一体化】 教科バランスのとれた学習習慣を定着させ、自主的・自律的な学習を促進する。また、探究活動(進路探究と課題探究)を充実させ、生徒の意欲を向上させる。 ＜具体的方策＞ ・年5回の面談や必要に応じた教科面談を実施する。 ・層別指導や志望別指導を充実させる。 ・課題の出し方を工夫する。(選択課題や自主課題の設定等) ・外部人材や卒業生を活用した探究活動を実施する。	【学校自己評価アンケート＜生徒＞】 ・「自律的に家庭学習に取り組んでいる。」(R6 2年次 70.7%) ・「総合的な探究の時間(Minamix)やLHR、講演会等を通して探究的な学びの機会が充実している。」(R6 2年次 78.4%) A:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を上回り、具体的方策も十分に行うことができた。 B:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度程度であり、具体的方策も行うことができた。 C:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を下回り具体的方策も十分に行うことができなかった。	・担任面談を3回(4月、6月、9月)実施し、生徒個々の学習状況や進路志望の把握に努めた。今後は、苦手教科のある生徒の教科面談を随時行う予定である。 ・探究課と連携し、課題研究の各分野(7分野)に外部講師を配置し、テーマ検討等の具体的なアドバイスを頂くなど、中間発表に向けて環境整備を行えた。 ・進路課と連携し、自主的・自律的な学習を促した。特に、6月に行った「NO課題WEEK」については、自主的に取り組めた生徒もいる一方で、総体前ということもあり部活との両立で計画を立てても行動できなかった生徒もいた。学習計画や学習方法について考えさせながら、今後も定期的に課題の出し方を工夫することで自主的・自律的な学習を促していきたい。 ・難関大受験指導【合格への道plus+1】を9月に始めた。参加生徒を核として、お互いに切磋琢磨できる雰囲気や年次全体で醸成していく。	B	【達成状況】 ・学校自己評価アンケート 「自律的に家庭学習に取り組んでいる。」64.7% (R6 2年次 70.7%) 「総合的な探究の時間(Minamix)やLHR、講演会等を通して探究的な学びの機会が充実している。」79.6% (R6 2年次 78.4%) ・アンケート「探究的な学びの機会が充実している」において79.6%(目標78.4%)を達成。7分野すべてでの大学教員連携体制を確立し、最終発表まで専門的な指導を受けたことで、生徒の知的好奇心と進路意識を大きく刺激することができた。 ・年間5回の面談を実施。特に最終回に実施した「クラスの枠を超えた面談」は、年次全体で生徒を多面的に見守る体制を強化し、教員の生徒理解を深化させる契機となった。 ・難関指導「合格への道plus+1」が軌道に乗り、新春セミナーには125名が参加。上位層が核となり、年次全体に「高みを目指す雰囲気」を波及させることができた。	B	・「自律的な家庭学習」の肯定評価は64.7%に留まり、昨年度および目標(70.7%)を下回る結果となった。「No課題Week」は自己管理能力を問う良い契機となったが、学習内容の質を自分でコントロールできない生徒へのフォローに課題が残った。次年度は、自律を促すことと、計画立案への「具体的な助言」のバランスを再考する必要がある。 ・今年度実施した探究活動やQFTの取組を土台に、次年度は進路実績に結びつく学力育成を強化する。	B
	3年次	【②進路実現につながるキャリア教育プログラム】 高い意志を持って、互いに高めあい切磋琢磨する集団として、その助力を目指す。 ＜具体的方策＞ ・必要に応じて適切な時機での担任との面談 ・個別の教科指導 ・教科面談 ・クラス間の情報共有のための担任会議 ・計画的な学習を促進させるためのアドバイス	【学校自己評価アンケート＜生徒＞】 ・「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。」(R6 2年次 77.6%) A:80%以上 B:75%以上 C:75%未満	適宜、担任の先生方の面談や教科指導のてこ入れ、進路課からの情報提供などにより、夏休み前から、生徒の学習に向けての意識は高まってきた。草岡祭以降の追い込みに向けて動いている。一方でなかなか学力が伸びてきていない層も見られ、今後の不安材料となっている。上位層は意識が高い状態を維持しているため、ブロック国公立大層を目指している生徒のさらなる引き上げを今後も進める必要がある。	B	【達成状況】 学校自己評価アンケート＜生徒＞ 「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。」39.4%(昨年度27.0%) やや当てはまる 48.2%(昨年度50.6%) あまり当てはまらない 9.9%(昨年度18.1%) 全く当てはまらない 1.1%(昨年度1.9%) 昨年度の肯定77.6%から87.6%に上昇した。2年次の数値や記述式アンケート結果と今年の結果を比較すると、昨年度までの自己中心的な傾向の回答から、内容的にこちらの考えを受け止めている様子が見られる。これも担任の先生方の粘り強く対応をされてきた結果と考えられる。	A	・受験を強く意識することで、意識的に進路に関しての情報を取り込めるようになった面もあるが、早い段階からの意識付けの難しさが、課題として残っている。 ・担任との面談が頻繁に行われることによって生徒理解と先生方への信頼が高まった。	A
	授業力向上委員会	【①教科指導と生徒指導の一体化】 教員全員が授業を中心とした教科指導力を向上させ、自律した学習者の育成に資する。 ＜具体的方策＞ ○全体テーマ「自律した学習者の育成～質問力の育成から思考力の向上～」について各教科で課題を明確化し、具体的な研究内容と研究計画を立てる。教科全員で研究を実践する。 ・授業力向上研修:3回実施する。1回目は講師から「質問力育成」についてオンラインでレクチャーを受ける。2回目はその講師を招き、研究授業・研究協議を行う。3回目は各教科が研究成果を発表する。 ・授業公開:1学期に全員が授業を公開し、互いに参観する。フィードバックで現状課題を把握する。 ・研究授業:研究実践のまとめとして、2学期に7教科の研究授業を実施する。 ・研究成果:『未来創造力』コモンルーブリック(4月・12月)を活用し、研究実践を通しての生徒の変容を把握、分析する。 ・年間を通した授業研究:各教科で教科会議の時間を中心に、入試研究(6教科の試験のみならず小論文・面接・実技等まで含む)に取り組む。	【『未来創造力』コモンルーブリックにおける取組前後の上昇値】 対象とする項目 ○社会で生きる知識・技能 ○批判的・論理的思考力 ○表現力 ○自律の精神 (1)上昇値が全生徒・全項目平均で A:0.50以上 B:0.25以上 C:0.25未満 (2)上記4項目のうち、上昇値が全生徒平均で0.25以上上昇する項目数 A:3,4 B:2 C:1,0	＜これまで実施した具体例＞ ○全体テーマ「自律した学習者の育成～質問力の育成から思考力の向上～」について教科全員で研究を実践する。 ・3週間(5～6月)の授業公開期間には、全教員が授業を公開し、互いに参観する機会を設定した。フィードバックを集約し、現状課題を把握する資料として各教科へ配布した。 ・第1回授業力向上研修を実施し、全教員が講師から「質問づくり(QFT)」についてオンラインでレクチャーを受けた。 ・委員会「質問づくり(QFT)」の事例を共有した。 ・11月に研究授業・研究協議を行えるよう計画を進めている。 ・研究テーマに限らず、年間を通して各教科で授業研究・入試研究に取り組むよう働きかけている。 ＜参考＞ 『未来創造力』コモンルーブリックにおける取組前の値(5月、全生徒対象) ○社会で生きる知識・技能(2.7) ○批判的・論理的思考力(2.7) ○表現力(2.5) ○自律の精神(2.7)	B	【達成状況】 『未来創造力』コモンルーブリックにおける取組前後の上昇値 対象とする全生徒・全項目平均で0.6(2.7→3.3)上昇した。⇒(1)(2)とも評価基準Aに該当 ＜実践内容＞ ・研究成果を校内外に共有する機会として、12月に八戸商業高校宮本先生を講師として招き、全体研修(研究授業・研究協議)を実施した。 ・研究成果を各教科でまとめ、校内で共有するとともに、次年度での継続した取り組みを検討した。 【成果と課題】 今年度、「質問づくり(QFT)」を通して、教員の授業力に質的な変容が見られた。教師主導の授業から生徒主体の授業へ変化した。単元の本質や育てたい力を意識した授業構想が進んだ。特に「質問の焦点」を考える過程で、生徒の実態を踏まえた思考過程の把握が促され、生徒と共に学ぶ授業への転換が図られた点は大きな成果である。授業を多角的に捉え直す契機となり、授業力向上につながった。一方で、実践の定着度やアセスメントには課題も残る。 ＜参考＞ 『未来創造力』コモンルーブリックにおける取組後の値(12月、全生徒対象)(4月からの変化) ○社会で生きる知識・技能(3.3)(+0.6) ○批判的・論理的思考力(3.3)(+0.6) ○表現力(3.3)(+0.5) ○自律の精神(3.3)(+0.6)	A	【課題】 ・「自律的学習者」の解釈にばらつき ・実践の定着度(部分的、限定的) ・各教科の手法にばらつき ・「質問の焦点」設定の難しさ ・質問の内容的な質、カテゴリの幅の向上 ・メタ認知(振り返り)の機会不足 ・適切なアセスメント方法 ・課題研究テーマ設定や他の学びの機会への波及が不十分 【次年度への方策】 ・「自律的学習者」の解釈の統一 ・学校全体での実践へ拡大(教員間での共通理解と実践の共有) ・問いを立てる力を「一過性」にしない仕組みづくり ・基礎的知識・技能と問いの往還 ・生徒の実態に応じた「質問づくり」の支援 ・メタ認知(振り返り)の機会増加 ・質の向上 ・授業内外をつなぐ学びの設計 ・年度当初に研究計画(日程含む)の確定	A
	DX推進プロジェクト	【④DX ハイスクール事業を核とした「探究的な学び」の推進と「情報活用能力」の育成】 DX ハイスクール事業を核として、生徒の「探究的な学び」を推進し、「情報活用能力」の育成を図る。 ＜具体的方策＞ ・DXハイスクール事業の遂行(調整・執行・報告) ・外部人材や卒業生を活用した探究活動の実施 ・DXハイスクール事業により整備した機器の活用推進	【学校自己評価アンケート＜生徒＞】 ・「総合的な探究の時間(Minamix)やLHR、講演会等を通して探究的な学びの機会が充実している。」(R6 2年次 78.4%) A:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を上回り、具体的方策も十分に行うことができた。 B:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度程度であり、具体的方策も行うことができた。 C:上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を下回り具体的方策も十分に行うことができなかった。	・探究課や2年次と連携し、課題研究の各分野(7分野)に外部講師を配置し、テーマ検討等の具体的なアドバイスを頂くなど、中間発表に向けて環境整備を行えた。 ・ICT機器の管理ツールを検討し、調達した端末の管理方法の構築を行えた。 ・整備した端末を後期に積極的に活用していく。	B	【達成状況】 ・学校自己評価アンケート「総合的な探究の時間(Minamix)やLHR、講演会等を通して探究的な学びの機会が充実している。」項目において肯定的評価79.6%(目標78.4%)。7分野すべてでの大学教員連携体制を確立し、最終発表まで専門的な指導を受けたことで、生徒の知的好奇心と進路意識を大きく高めることができた。	B	・今年度確立した「外部連携」を充実させ、生徒の探究活動の質を深化させる。 ・7分野それぞれの特性に応じたDXツールの活用事例(例:化学分野でのデータロガー活用、人文分野でのアンケート集計・分析等)を組織的に共有し、生徒の情報活用能力の育成を加速させる。	B

学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合 評価	本年度の課題と 次年度への方策	総合 評価
2 高い 人間 力の 育成	生徒課	【①自己指導能力を高める生徒指導】 【③人権意識や規範意識、公共心等の育成】 「安心安全で快適な学びの場の実現」 i 主体的な生徒会活動による集団づくり・リーダー育成 ii 校内美化の推進、安全教育の推進 iii ひらかれた相談体制の構築と生徒の多面的理解及び情報共有 <具体的方策> ・生徒の意見や声を学校行事等へ反映させていく体制を強化する。生徒会を中心に生徒がもっと議論できる場を設けていく。 <ii 具体的方策> ・通常清掃、吉岡川クリーン大作戦、大掃除、整美委員による安全点検、保健委員による水質調査など生徒による環境整備。生徒会→委員会→全校生徒→生徒会という形でルールやマナーについて学ぶ機会を増やしていく。 <iii 具体的方策> ・不登校生徒の未然防止はもちろん、早期発見・早期対策。 ・教職員研修の実施、生徒情報共有の強化・深化。「リンゴファイル」(個別対応記録)の活用促進。	【学校自己評価アンケート<生徒>】 ・「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして生徒の自己成長につながる機会がいろいろある」 (R6 全体 94.8%) ・「学校では、命の大切さや、社会のルールや日常生活のマナーについて、いろいろな場面で学ぶ機会がある」 (R6 全体 86.0%) ・「悩んだり、困ったりした時に、先生は親身に相談にのり解決に向けて取り組んでくれる」 (R6 全体 87.9%) A: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を上回り、具体的方策も十分に行うことができた。 B: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度程度であり、具体的方策も行うことができた。 C: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を下回り具体的方策も十分に行うことができなかった。	i 主体的な生徒会活動による集団づくり・リーダー育成 委員会・部活動・草岡祭実行委員会等の主体的な生徒会活動を活発に行っている。草岡祭については生徒の意見を多く取り入れ、大改革(日程変更・模擬店)を進めている。今後はリーダーの生徒を中心に課題を発見し解決できる集団づくりをしていく。 ii 校内美化の推進 生徒会を中心とした吉岡川クリーン作戦や、整美委員を中心とした中庭花壇の整備・清掃チェックを行った。また、保健委員による水質調査など生徒による環境整備体制も整っている。今後は生徒主導で課題を発見し解決できる委員会活動を展開していく。 iii ひらかれた相談体制の構築と生徒の多面的理解及び情報共有 会議の形式を変更し、学年の課題を全体で共有することができている。また、今年度より全学年に生徒支援シートを作成し、不登校等の状況を可視化することに成功した。「リンゴファイル」(個別対応記録)の活用も各担当が意識して取り組んでくれている。 今後は教職員研修を通して不登校生徒の理解を深め、継続した支援を行える体制づくりに取り組んでいきたい。	B	【達成状況】 ・学校自己評価アンケート 項目ア → 生徒全体 94.8% 評価B 項目イ → 生徒全体 89.5% 評価A 項目ウ → 生徒全体 87.5% 評価B 学校行事や集団づくりに関する項目で高い肯定率を得ており、生徒が自己成長や他者尊重を実感できる環境が構築されている。「草岡祭」の大改革(日程変更・模擬店の導入)において生徒の意見を積極的に反映し、高い満足度と成果を得た。また、執行委員会の開催頻度を高めたことで、生徒の自治意識とリーダーシップの育成が加速した。多面的な生徒理解と情報共有のための仕組み「生徒支援シート」の導入により、不登校傾向等の状況を可視化し、さらに個別対応記録「リンゴファイル」の活用を徹底したことで、担任間で迅速に情報共有が行われ、多角的な生徒理解につながった。	A	【課題と次年度への方策】 可視化された生徒情報を活用し、個人の対応に留まらず、学校全体として組織的に支援を行う仕組みづくりに注力する。 トイレ清掃をはじめとする美化活動に課題が残る。次年度は整美委員会を中心に、清掃箇所の分担や活動内容を抜本的に見直し、環境の維持・向上を図る。	
	総務課	【②国際感覚を養うグローバル活動「グローバルプログラム」の実践】 <具体的方策> ○国際理解・国際交流の機会の充実と体系化 ・カンボジア研修の実施。 ・カシミア高校受入の実施。カシミア高校オンライン交流の継続。 ・カシミア高校受入の機運を高める「カシミアウィーク」の設定(オンライン交流、グローバル講演会、ホストファミリー説明会、美観地区案内募集などを短期間に集める) ・上記2つの学校主催海外研修を軸としたグローバルプログラムの体系化(2年1セット)。 ・他の選択肢としての県・市・その他団体主催の海外研修・海外留学の情報の集約的提供、参加の奨励。 ・他の選択肢として春季休業中に学校主催の海外研修の再開。 ・海外に行けなくても、県・市・その他団体主催の国内グローバル関連行事の情報の集約的提供、参加の奨励。 ・海外経験を生かす進学のサポート、加えて、海外進学希望者のサポートを行う。 ○多様性を受容する姿勢の育成 ・カンボジア研修(他の海外研修・短期留学も)生徒の成果発表の場を設け、学校全体へ波及させる。 ・グローバル講演会のテーマに「異文化理解」「多様性受容」を盛り込む。 ⇒ 自分も海外へ行ってみたい、行事に参加してみたい…と思う生徒を増加させる。	【(1)本校が主催するまたは案内する<県・市・その他団体の>海外研修・海外留学へ参加する生徒の数】 <R6 32名, R5 36名(倉敷留学含めず)> A: 50名以上 B: 30名以上 C: 30名未満 【(2)本校が主催するまたは案内する<県・市・その他団体の>グローバル関連行事へ参加する生徒の数】 <R6 29名> A: 50名以上 B: 30名以上 C: 30名未満	<これまで実施した具体例> ○国際理解・国際交流の機会の充実と体系化 ・カンボジア研修を6年ぶりに企画し、事前・事後研修を含めた体系化ができた。過去最多33名の生徒が応募した。直前で中止せざるを得なかったが、生徒の海外渡航への意識の高さが垣間見えた。次へつなげさせたい。 ・カシミア高校受入へ向けた企画・検討が進行中である。10月、11月を「カシミア月間」と銘打ち、グローバル講演会・ホストファミリー説明会&募集、希望者参加のオンライン交流等を計画している。また、今年度はこれまで3回のオンライン交流を2年次の授業内で実施しており、受入へのムードが高まりつつある。 ・新たな選択肢として、本校主催春季海外語学研修(3月オーストラリア・シドニー)を企画している。 ・本校から挑戦できる他の海外研修・海外留学や国内グローバル関連行事の情報も集約的に提供し、参加を奨励している。 ・今後の課題として、海外経験を生かす進学のサポート、加えて、海外進学希望者のサポートを行いたい。 ○多様性を受容する姿勢の育成 ・カンボジア研修ではできなかったが、草岡祭で春季の海外研修・短期留学へ参加した生徒の成果発表の場を設けた。 ・10月にグローバル講演会を企画している。	B	【達成状況】 (1)本校が主催するまたは案内する<県・市・その他団体の>海外研修・海外留学へ参加する生徒の数 カンボジア研修 33名(※直前に中止) 岡山県の高校生短期留学プログラム 5名 春季海外語学研修 25名 (×倉敷市カンザスシティ訪問研修 1名選考漏れ) 合計63名参加 ⇒ 評価基準Aに該当 (2)本校が主催するまたは案内する<県・市・その他団体の>グローバル関連行事へ参加する生徒の数 カシミア高校ホームステイ受入 14名 カシミア高校美観地区案内 59名 Global Studies Program(国内留学)2名 岡山県教委留学促進フェア 1名 倉敷市国際フェスティバル 2名 AMDA関連イベント 1名 JICA関連イベント 1名 合計80名参加 ⇒ 評価基準Aに該当	A	○国際理解・国際交流の機会の充実と体系化 ・カンボジア研修は中止となったが、研修内容等の改編も含め、持続可能な形で2年後の実施につなげる。 ・カシミア高校との姉妹校提携10年目(R10(2028))に向け、姉妹校継続、提携内容更新の検討・交渉を始める。 ・春季海外語学研修実施後の振り返りと改善を行う(行き先・期間設定・研修内容など)。 ・県・市・その他団体主催の海外研修・海外留学、また国内グローバル関連行事への参加者を増やす。 ・海外経験を生かす進学のサポート、加えて、海外進学希望者のサポートを行う。 ・グローバルスタディーズ同好会との連携を図る。 ○多様性を受容する姿勢の育成 ・学校全体でグローバル活動をより積極的に盛り上げるムードづくりを行う。 ・海外研修・短期留学参加生徒の成果発表の場を設け、学校全体へ波及させる。 ・グローバル講演会に加え、他の校内のグローバルイベントを創出する。	
	1年次	【①自己指導能力を高める生徒指導】 他人を思いやる気持ちを大切に、調和の取れた言動をとることができる生徒を育成する。また、自主的・自律的な行動をとり、互いに高め合うことのできる集団をつくる。 <具体的方策> ・授業や行事で、他者と関わる機会を多く設定し、協働する姿勢を育成する。 ・自分の可能性を狭めることがないように、面談などを通して積極的な挑戦を後押しする。 ・行事等の運営を生徒に任せていき、生徒が活躍する機会を増やしていく。	【学校自己評価アンケート<生徒>】 ・「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある。」(R6 1年次 90.9%) ・「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして自己成長につながる機会がいろいろある。」(R6 1年次 96.6%) A: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を上回り、具体的方策も十分に行うことができた。 B: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度程度であり、具体的方策も行うことができた。 C: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を下回り具体的方策も十分に行うことができなかった。	・授業中は仲間と話し合い協力している様子がうかがえる。 ・クラス面談などで生徒の挑戦を後押ししてきている。京大キャンパスツアーなどにも積極的に参加している。 ・各種講演会や年次集会などで生徒自身が運営し発言する機会も更に増やしていきたい。	B	【達成状況】 学校自己評価アンケート ・「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある。」は92.8%(R6 1年次 90.9%) ・「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして自己成長につながる機会がいろいろある。」は97.3%(R6 1年次 96.6%)であった。	A	・様々な場面で生徒同士で切磋琢磨する状況が見られるように教員側からの工夫をしていきたい。 ・修学旅行や草岡祭などでリーダーを育成し、それぞれが協力できるような体制を構築させていきたい。	A

学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と 次年度への方策	総合評価
	2年次	【①自己指導能力を高める生徒指導】 多様性を理解・尊重し、切磋琢磨しながら互いに高め合うことができる生徒を育成する。また、生徒が自主的・自律的な行動をとり、自分らしい生き方を追求することができるようにしていく。 ＜具体的方策＞ ・授業や行事で、他者と関わる機会を多く設定し、協働する姿勢を育成する。 ・積極的な挑戦の機会を設け、失敗経験も肯定的に捉えさせ、次につなげさせる。 ・年次集会や年次通信等で多くの生徒の頑張りをたたえる。	【学校自己評価アンケート＜生徒＞】 ・「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして自己成長につながる機会がいろいろある。」(R6 2年次 93.1%) ・「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある。」(R6 2年次 80.3%) A: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を上回り、具体的方策も十分に行うことができた。 B: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度程度であり、具体的方策も行うことができた。 C: 上記学校自己評価アンケート項目の肯定的評価は昨年度を下回り具体的方策も十分に行うことができなかった。	・年次集会等での講話をきっかけに、多様性を理解・尊重する雰囲気はさらに醸成されつつある。 ・草岡祭を新たなことに挑戦することや仲間と協働することの楽しさを理解する好機と位置づけ、準備や本番での生徒の発想や工夫等活躍ぶりを、各クラスの終礼や年次集会で大いに評価した。 ・スポーツ大会等では、多くの生徒やクラスを表彰する機会が持てた。こうした機会が少ないため、今後さらに創出していきたい。	B	【達成状況】 ・アンケート「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして自己成長につながる機会がいろいろある。」95.1% (R6 2年次 93.1%) ・アンケート「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある。」88.3% (R6 2年次 80.3%) ・アンケートの「自己成長につながる機会(95.1%)」「個の尊重と受容(88.3%)」の数値を高い水準で維持することができた。特に「The Grammarian Contest」や「高校生クイズ」といった仕掛けが、クラスの枠を超えた切磋琢磨と連帯感を生み、生徒が互いの良さを認め合う土壌ができた。 ・行事を通じた成功体験だけでなく、そのプロセスを年次集会やブログ等で丁寧に価値付けしたこと、生徒の自己肯定感と挑戦への意欲を高めることができた。 ・総務課と連携したブログ発信は12月末で65件に達した。学校生活の「見える化」により、生徒・保護者・教員間で肯定的なイメージを共有でき、年次全体の活力を外部へも発信できた。	A	・各種行事で醸成された「主体性」や「協働する姿勢」を、いかに日々の教室内での学びに転換していくかが課題である。行事の盛り上がりを一時的なものにせず、日常の授業内での対話や自律的な学習習慣に接続させる工夫を検討したい。 ・良好な集団環境を土台とし、今後は「周りに合わせる」だけでなく、生徒一人ひとりが自分の進路や生き方を自ら考え、行動できる力を養う。	
	3年次	【①自己指導能力を高める生徒指導】 昨年度から少しずつ取り組み始めた草岡祭の3年次新企画において、対話力を持って計画と実施を行い、体現化させる。 ＜具体的方策＞ ・各クラスの文化委員や室長を中心に模擬店開催にむけての改善点を協議 ・クラス内での話し合い ・模擬店開催における他校の取組状況に関わる情報を生徒に提供する。	【実施後に年次全体にアンケートを実施、満足度の割合を指標とする】 R6 2年次 LHR実施の企画後アンケート結果(とても満足・満足の割合69.5%) A: 80%以上 B: 70%以上 C: 70%未満	生徒対象のアンケート結果 ①楽しく満足できた。64.6% (173人) ②概ね満足できた。31.7% (85人) ③あまり楽しみを感じることができず、不満だった。3.0% (8人) ④まったく楽しくなく不満だった。0.7% (2人) ①②の肯定的な回答率が96.3%であった。 ・模擬店初年度と言うことで、課題も浮き彫りになったが、生徒たちが生き生きと活動して、模擬店の形を作ってくれた。 ・アンケートの記述内容も、非常に有意義な意見が多く、次年度以降の参考になり得るものとなった。	A	【達成状況】 生徒対象のアンケート結果 ①楽しく満足できた。64.6% (173人) ②概ね満足できた。31.7% (85人) ③あまり楽しみを感じることができず、不満だった。3.0% (8人) ④まったく楽しくなく不満だった。0.7% (2人) ①②の肯定的な回答率が96.3%であった。 ・模擬店初年度と言うことで、課題も浮き彫りになったが、生徒たちが生き生きと活動して、模擬店の形を作ってくれた。 ・アンケートの記述内容も、非常に有意義な意見が多く、次年度以降の参考になり得るものとなった。	A	アンケート上の満足度では、高い支持を得ているが、数々の問題点が残っていることも事実である。生徒たちの負担、近年の気候の状況や使用可能な施設の状況を総合的に判断した上での変更が求められるものもあると考えている。しかし、一方では毎年変更することが当然にならないように注意が必要だとも考える。	
	市民教育委員会	【③人権意識や規範意識、公共心等の育成】 ○自他を大切にした言動のできる生徒の育成を図る。 ＜具体的方策＞ ・生徒一人ひとり大切にし、生徒の人権を尊重した言動を行うことができるよう教員研修等を実施する。	【学校自己評価アンケート＜生徒＞】 ・「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある。」(R6 全体 86.7%) A: 90%以上 B: 85%以上 C: 85%未満	・夏期休業前に県教委作成の生徒の自殺予防に関わる動画を視聴し、生徒の人権を尊重した関わり方や指導のあり方等について研修を行った。 ・10月に教職員研修としてSSWの河中綾氏に講演をしていただき、特性を持つ生徒に関わる問題を把握した場合の対応の仕方、注意点などを中心にSSWの活用の仕方、外部機関との連携のあり方等について学ばせたい。	B	【達成状況】 学校自己評価アンケート 「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある。」 肯定的評価割合: 89.5% 前年度より2.8ポイント上昇しており、担任による丁寧な面談や授業等における生徒1人1人を大切に声かけ等が肯定的評価につながっていると考えられる。	B	次年度も引き続き丁寧な面談を実施し、生徒一人一人の人格を尊重した接し方を行っていくよう呼びかけていく。	

学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
3 開かれた学校づくりの推進	総務課	【①信頼関係を築くための情報共有の実践】 ＜具体的方策＞ ○保護者との信頼関係の構築 ・PTA役員への積極参加の促進、PTA活動の充実(保護者の充実感に配慮)。 ・日常から、より丁寧・適切な保護者対応(⇒生徒にも同様)。 ○連携強化のための中学校訪問・塾訪問の実施 ・オンデマンド方式での中学校訪問(1年次団と連携、入学前の中学校訪問の内容を踏まえ、入学後の様子を伝達)。 ・出願数増減の激しい中学校には別途中学校訪問を実施(2学期、総務課を中心に)。 ・塾の進学説明会をアピールの機会として積極活用。 ・他の塾については、他の課の協力を得てできるだけ多く訪問。 ○夏季・秋季オープンスクール、保護者対象説明会の充実 ・広報活動に生徒会を中心した在校生の主体的な関わりをさらに促進。 ・新入生アンケート等を参考に保護者対象説明会の内容をさらに改訂(生徒・保護者目線)、質疑応答の時間を確保。 ○ホームページにおける持続的な情報発信 ・HP情報の更新、ブログを中心とした頻繁な情報発信。 ・HP、ブログに載せる楽しい記事(コンテンツ)の作成を、生徒含め学校全体に依頼。 ・HP閲覧数の推移、SNSフォロワー数を注視。	【本校への一般入試志願倍率＜1次調査倍率＞】 ＜R7 1.36 / R6 1.08 / R5 1.20＞ A: 1.25以上 B: 1.20以上 C: 1.20未満	＜これまで実施した具体例＞ ○保護者との信頼関係の構築 ・葦岡祭の実施形態変更に伴い、PTAバザーの日程・内容を協議した。生徒との関わりが増え、充実感が持てた。 ○連携強化のための中学校訪問・塾訪問の実施 ・オンデマンド方式での中学校訪問はあまり機能せず、次年度までには形態を再検討する。 ・出願数が近年減っている中学校には2学期中に再度訪問を計画したい。 ・本校の新入生が通っていた塾を調べ、スクールガイドを送付した。今後、その一部へは訪問も計画したい。 ○夏季・秋季オープンスクール、保護者対象説明会の充実 ・新たに各部による「部活動紹介」を入れ、在校生の主体的な関わりをさらに促進した。 ・夏季OSの当日は熱中症が心配される天候だったため、一部実施計画を変更した(次年度は事前の検討が必要)。 ○ホームページにおける持続的な情報発信 ・HP情報の更新、ブログ等での情報発信は随時行えているが、遅くなる傾向があり、改善したい。 ・ブログ用の記事(コンテンツ)の作成を、今後は生徒にも依頼をしていきたい。	B	【達成状況】 【本校への一般入試志願倍率＜1次調査倍率＞】 1.15倍 ⇒ 評価基準Cに該当	C	○保護者との信頼関係の構築 ・生徒の自主自律的な活動のサポートをPTAにも依頼する。 ○連携強化のための中学校訪問・塾訪問の実施 ・1学期の中学校訪問の実施形態を広報中心に転換する。 ・2学期の中学校、塾への訪問が実施できなかった。次年度は時期・分担等を検討し、当初から年間計画に組み込む。 ○夏季・秋季オープンスクール、保護者対象説明会の充実 ・夏季の部活動見学・紹介の実施形態を熱中症対策のため室内で実施する。 ・生徒・保護者からの質疑応答の時間を確保する(安心感・満足感を与える)。 ○ホームページにおける持続的な情報発信 ・ブログ記事の作成を、生徒を含め学校全体に依頼し、本校の魅力の発信を強化する。 ・次年度はInstagramの活用を積極的に活用し、中学生目線のオンラインの発信を増やす。	B
	探究課	【②地域・関係機関等との連携強化】 ＜具体的方策＞ ○課題研究・講演会等における外部人材・組織と連携し、探究活動の深化を図る。 Minamixゼミ等で、卒業生、地域人材、大学教員との連携を進める。 ○社会貢献活動の推進 小・中学校での学習支援活動や学習ボランティア等の活動を通して、地域に貢献する。	【「総合的な探究の時間」の外部人材や外部組織を活用し、その数が昨年より増加した。】 ＜R6 25名＞ A: 8人以上 B: 5人以上 C: 5人未満	・総合的な探究の時間の外部講師として経済・経営分野1名、教育分野1名、数理・データ分野1名、物理分野1名、医療分野1名 人文分野1名)7名の講師を招聘した。(DX事業との共同事業) ・葦高小学校学習支援ボランティア 3回実施予定 第1回参加者59名 第2回参加予定者数65名 第3回参加予定者数53名 ・新田中学学習支援ボランティア 延べ参加者数71名 ・2年次課題研究の中間発表会后、本発表に向けて外部講師の助言を活用できる仕組みづくりに取り組む。	B	【達成状況】 ・外部講師との連携・課題研究Minamixゼミの深化 例年の行事に加えて総合的な探究の時間の外部講師招聘は延べ42名と多くの方に指導をいただいた。初めての取組であり、生徒の研究スケジュール調整や指導いただく内容についてもより緊密な連携が必要である。探究チームでも内容を検討中である。 ・学習支援ボランティア新田中参加者数延べ71名、同葦高小177名 新田中での学習支援に加えて本年度は年3回の葦高小での学習支援活動を実施することができた。	A	・外部との連携では高校教員の指導範囲と大学や企業への依頼事項を分けることによりそれぞれの強みが発揮されるように計画する。 夏期休業中に外部と連携して生徒が調査研究活動を可能にするように保険等も見直しを行った。次年度こういった生徒自らが研究活動ができるように年次との連携をはかる。	

学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と 次年度への方策	総合評価
4 教員のウェルビーイングの向上	管理職	【①効率的な学校運営】 ・PDCAサイクルに基づいた業務の精選・効率化・正確性の向上 ・教育環境の充実と効率的活用研究 (具体的方策) ・企画会議で学校課題を分析し、事業の在り方(継続、変更、廃止、新規等)を検討・提案する。 ・課及び委員会を再編し、効率的業務運営を推進する。 ・自習室、面談スペースを整備するとともに、施設・設備の更新・充実を機動的に行う。 【②協働的な教職員組織】 ・職場の心理的安全性の確保 ・「チーム倉敷南」として、丁寧な情報共有と助け合う風土の醸成 (具体的方策) ・学校経営計画及びスクール・ポリシーに則ったミドルアップダウンの組織運営を推進する。(承認型の企画会議から発議・提案型の企画会議へ) ・サラヨクの会やリフレッシュ研修等の実施により、教職員のベクトル合わせを行うとともに同僚性の向上を図る。 ・定期的な面談だけでなく、日常的に教職員への声掛けを行うことで、風通しの良い職場環境をつくる。	【学校自己評価アンケート＜教職員＞】 ・「学校は心理的安全性が保たれていて、意見が言いやすい環境となっている」 (R6 80.0%) A: 85%以上 B: 80%以上 C: 80%未満 ・「学校は様々な教育活動にチームワークを意識して取り組み、各課や年次などの連携がとれている」(R6 72.3%) A: 77%以上 B: 72%以上 C: 72%未満 ・「学校は教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」 (R6 64.6%) A: 70%以上 B: 65%以上 C: 65%未満	・企画会議で学校課題に係る協議の時間を多く設けるとともに、各年次や分掌の会議を通じて広く聴取した意見が反映されるようにしている。 ・総合的な探究の時間の在り方を検討するワーキンググループを立ち上げ、分掌の枠組みを超えた組織で学校課題の解決に取り組んでいる。 ・スタディサプリ及びClassiiに係る検討やスキー・スノーボード研修継続の可否の検討を進めるなど、PDCAサイクルにのっとり事業等の検討を行っている。 ・教育環境の改善を図るため、体育館への大型冷暖房を購入するとともに、自習室や面談室等の整備計画を進めている。		【達成状況】 ・企画会議は発議・提案型で活発な意見交換ができた。PDCAサイクルにのっとり事業検討を行い、次年度からのClassii導入やスタディサプリの廃止、スキー・スノーボード研修の廃止を決定した。 ・総合的な探究の時間の在り方を検討するワーキンググループで、キャリア教育の視点からプログラムを再構成し、教育課程を変更した。 ・教務補助員の事務的業務の補助により、教員の教材研究や生徒と向き合う時間の増加につながった。 ・学校課題解決に向けた目線合わせの会「サラヨクの会」は2月10日実施予定である。 ・防犯設備や多目的トイレを整備した。自習室の整備は3月2日完成予定である。		・学校自己評価アンケート「学校は教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる。」肯定的回答は69.8%。昨年度から5.2ポイント向上したが、更なる改善のために次年度も引き続き、行事・業務等の見直し(再定義、廃止、縮小、統合等)を図る。	
	教務課	【②PDCAサイクルに基づいた業務の精選・効率化・正確性の向上】 (具体的方策) ・成績処理でのマニュアルの徹底をはかる。また、チェックリストの作成等でミス削減(撲滅)する。 ・教務課のリーダー会議の記録を翌日(火曜日)に作成して配布し、課内での共有を図る。	・「学校は心理的安全性が保たれていて、意見が言いやすい環境となっている」 (R6 80.0%) A: 85%以上 B: 80%以上 C: 80%未満 R7 88.7% 評価A	・成績処理におけるミスの防止のためチェック欄を設けたマニュアルやチェックリストを全職員に配布し、徹底が図れるようにしている。 ・教務課のリーダー会議の記録を翌日(火曜日)に作成して配布することで、課内の迅速な情報共有が図れている。		・成績処理においてチェック欄を設けたマニュアルやチェックリストを全職員に配布し、徹底がはかれるようにしている。 ・教務課のリーダー会議の記録を翌日(火曜日)に作成して配布することで、課内の共有がはかれている。		・次年度に向けて、各係で気づいた点や改善点などをマニュアルに追記し、より円滑な業務ができるように改善していきたい。	
	生徒課	【②協働的な教職員組織】 ＜具体的方策＞ ○教職員にとっても「チーム倉敷南」を感じられる部活動の推進。 ・生徒や同僚との交流の場としての部活動。 ○課内の分掌業務の精選・効率化によって生徒と接する時間をつくる。 ・各年次団との連携により、負担の偏りを減少させ、チームとして取り組む。 ・掲示板の活用による業務の可視化。	・「学校は様々な教育活動にチームワークを意識して取り組み、各課や年次などの連携がとれている」(R6 72.3%) A: 77%以上 B: 72%以上 C: 72%未満 R7 75.5% 評価B ・「学校は教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」 (R6 64.6%) A: 70%以上 B: 65%以上 C: 65%未満 R7 69.8% 評価A	・多くの部が中国大会(陸上・剣道・棋道・ハンドボール・空手・レスリング)・全国大会(陸上・棋道・放送無線・空手)へ出場することができている。その成果を教職員全体で共有し、学校の活性化につながっている。校長室入り口及び正面玄関へ部活動等のトロフィーなどを飾っており、多くの人の目に触れるようになり、生徒・顧問の励みにもなっている。 ・空手・レスリング・柔道などの個人の活動にも担任や学年団の先生方の協力によりサポートすることができており、生徒の活動をチームでサポートする体制ができています。 ・会議の中に学年の課題発見タイムを導入することにより、学年生徒課の連携及びチーム力の強化につながっている。 生徒の活動が活発になればなるほど、教員の業務負担が増しており、これをどのようにして軽減するか、また、課内の分掌業務の精選・効率化をどうやったら進められるかが課題である。		部活動においては、陸上・剣道・棋道・ハンドボール・空手・レスリング・放送無線など多くの部が中国・全国大会へ出場した。これらの成果を教職員で共有するとともに、校長室前の展示スペースを整備することで、生徒・教職員の意欲向上と「チーム倉敷南」としての連帯感を醸成した。運営面では、生徒課会議に「学年課題発見タイム」を導入し、年次団や教育相談との組織的連携を強化した。また、掲示板による業務の可視化を進めたことで、情報共有を迅速に行え、教職員のチーム力を強化できた。		部活動の負担感が増大している現状に鑑み、活動の質的な転換を図る。教職員・生徒双方の負担軽減を考慮した「持続可能な部活動の在り方」を模索すると同時に、生徒会執行部や各種委員会との連携を深化させる。部活動のみに依存しない生徒主体の活動機会を創出し、学校全体でより多角的かつ自律的な活動の活性化を促す。	
	進路課	教員研修を積極的に実施し、全ての教員が自信を持って進路指導の行えるサポート体制を構築する。 ＜具体的方策＞ ・全教員対象の進路研修会(6月・12月)や希望者対象の進路OJT研修を実施する。		・卒業生(49期)の進路報告会を4月に実施し、3年間を見据えた進路指導の中で低年次段階からの指導の重要性を全教員で共有することができた。7月には進路研修会を実施し、3年次生の具体的な進路指導事例を用いたケーススタディを通して、戦略的な進路指導法が共有できた。 ・課会議の定期開催により、年次を超えた指導の方向性のすり合わせおよび各年次の情報共有に努めている。	B	・課題考査の廃止、土曜講座「華岡セミナー」の見直しなど昨年度の反省を踏まえ、教育活動のPDCAサイクルの中でその改善を行うことができた。 ・進路検討会に際して、進路研修会を実施。大学入試の動向と3年間を見据えた進路指導のイメージを教員全体で共有することができた。また、総合型選抜・学校推薦型選抜の指導についても学校全体で取り組み多くの生徒の合格につなげることができた。	A	・次年度へ受験指導のノウハウを継承していく。研修内容の充実および精選を行っている。	A
	探究課	【②協働的な教職員組織】 ＜具体的方策＞ ・各年次「総合的な探究の時間」の内容を活動ごとに振り返り、見直しをする。 ・チームリーダーと各年次の担当者が連携して、次年度に向けて改善を図る。 ・リーダー会の記録を課のメンバーにすみやかに配付し、情報を共有する。 ・担当した業務の手順や資料を整理し、記録に残しておく。		・探究係会(1・2年次合同)を月1回程度のペースで実施。総合的な探究の時間の進め方についての打ち合わせを行い、課題や今後の計画について情報を共有している。 ・進路課や教務課と連携し、カリキュラム上で「進路探究」と「課題探究」の両輪を有機的にリンクさせ系統的に進めることができるよう、スケジュール化する。		本年度、総合的な探究の時間の在り方、及び内容についてワーキンググループとともに見直しを行った。次年度1年次生から順次実施していく。課内探究チーム会も開催し、授業や行事についての検討を行った。		探究課内の業務内容について精選を行う。	

学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合 評価	本年度の課題と 次年度への方策	総合 評価
	授業力向上委員会	【②協働的な教職員組織】 教員全員が授業を中心とした教科指導力を向上させる。 ＜具体的方策＞ ・授業公開期間に教員全員が1回授業を公開し、互いの授業参観を行う。参観者から授業者へのフィードバックを通して、自らの授業の現状課題を見つけ、授業改善につなげる。 ・フィードバックでは、Google Formsを利用し、互いがその後で前向きに授業力を向上できるように建設的な意見・感想を伝え合う。		・5月から6月に授業公開を教員全員が行い、互いの授業を参観する機会を設けた。フィードバックでは、良い点と改善点を一つずつ入力してもらい、互いへの意見を言いやすい工夫をした。		・同じ研究テーマに基づいた研究実践を全教科で行い、11月～12月に7教科(芸術・家庭・情報からは1教科の輪番)の研究授業を行った。 ・4つの研究授業は同じ日に実施し、外部講師を招へいた。放課後に、全教員参加で研修会(研究協議)を行った。 ・1月末を目途に各教科の研究の成果をまとめ、発表会を行って校内で共有した。 ⇒ 前年まで各教科で行ってきた研究授業と研究協議を学校全体の研修として「共有」できた。各教科の特性を生かした「質問づくり(QFT)」の様々な取組を学ぶことができた。		・限られた教科、教員のみが取組を行う状況にならないように、教科全体・学校全体で授業力向上に取り組む雰囲気醸成したい。教科横断的、または教科から学校行事や探究活動への波及的な、取り組みが増えるように促したい。	
	DX推進プロジェクト	DXハイスクール事業の主管分掌として、関係部署と連携し、滞りなく事業を遂行する。また、校務のDX化を推進する。 ＜具体的方策＞ ・DXハイスクール事業により整備した機器の活用推進 ・Wi-Fi等の環境整備 等		・探究課情報チームと連携して、昨年度までに行った校務のDX化(保護者連絡システム・朝礼連絡シート・終礼連絡シート・Googleカレンダー)において年度更新を行い、引き続きスムーズに使うことができる環境を維持している。 ・今後はマニュアルの整備を適切に行っていく。		・DXハイスクール事業の主管分掌として、事業計画に基づいた予算執行および教育環境の整備(PC・タブレット端末の整備、CALL教室の充実等)を遅滞なく完了した。 ・校務DX(保護者連絡システムや共有シート等)についても、年度更新・安定運用を継続し、教職員の情報共有の効率化を維持できた。		・整備した機器の教育活動における活用推進については、環境構築や管理体制の整備に比重を置いたため、各教科や探究活動における具体的な活用モデルの提示や教員の操作スキルに係る研修が十分に行えなかった。 ・次年度は「整備した環境をどう教育効果に繋げるか」を焦点とし、探究課や各教科との連携を強化して、授業実践を通した活用ノウハウの蓄積と共有を図る。	
	市民教育委員会	【②協働的な教職員組織】 全教職員が人権感覚を高め、互いを尊重した言動が行えるようになる。 ＜具体的方策＞ ・人権に関する研修によって、教員の人権感覚を高める。		・教育委員会作成の動画を視聴し、適切な生徒指導のあり方の研修を実施した。 ・教育相談係と連携し、10月に本校SSWによる生徒理解のための研修会を実施する予定である。		動画による研修や教育相談係と連携した教員研修を行うことで生徒の人権に関する理解を深め、人権感覚を高めることができた。		次年度も引き続き教員研修を実施して、人権感覚の高揚を図りたい。	

